

## 舞う政治と踊らせない政治 ——『加賀藩資料』にみる芸能統制——

西 島 千 尋

### 要 旨

2006年の「風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律」（以下、風俗営業法）の改正により、ダンス営業が規制されることとなった。この規制が、日本国憲法で保障される「表現の自由」を侵すものであるとして、2012年にはLet's DANCE署名推進委員会が立ち上がった。こうした動きのもと、2014年、内閣が風俗営業法改正について閣議決定を行い、ダンス営業規制が撤廃された。ダンス営業は新設される「特定遊興飲食店営業」に分類されることになったが、同委員会は「遊興」という形で規制対象が拡大されると懸念している。

こうしてある種のダンスが規制される一方で、保護されたり、経済的な援助を受けたりするダンスもある。つまり、ハイカルチャーとされるダンスと、クラブなどのダンスは、扱われ方に差異があるのである。資料を探ると、この区別は江戸時代にはすでに「舞」と「踊」の差として生じており、さらに言えば、身分制度と並行していたことがわかった。本稿で取り上げるのは加賀藩の事例である。金沢市は、能を市のシンボルとしているが、かつてはすべての身分に許されていた訳ではない。能は武家の式楽であり、意図的に特権化されていたのである。その過程において、「舞」と「踊」の区別は色濃くなっていった。この過程を整理するために、本稿では『加賀藩史料』に着目している。

加賀藩は、外交や藩内政治、ひいては親族間のコミュニケーションのために能という「舞」を重んじ特権化する一方で、一揆や風紀の乱れを恐れて「踊」を全面的に禁じていた。「踊」への為政者の危惧は、現代にも通じるものがあると言える。

キーワード：『加賀藩史料』、芸能統制、ダンス、舞、踊

## はじめに

近年、あるテレビ番組で「踊れない国ニッポン！ここがヘンだよ風営法 SP」と題した特集が放映されるなど<sup>1)</sup>、ダンスに関する規制が話題となっている。2006（平成18）年、「風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律」（以下、風俗営業法）が改正され、第2条第1項第4号において「ダンスホールその他設備を設けて客にダンスをさせる営業」に、営業時間が午前0時（一部地域午前1時）まで、客室床面積要件が66㎡以上という規制が課された（以下、ダンス営業規制）。

この規制が日本国憲法第3章第21条で保障される「表現の自由」を侵すものであるとして<sup>2)</sup>、作曲家の坂本龍一や大友良英らが呼びかけ人となり、2012（平成24）年に風俗営業法の改正を目指す「Let's DANCE 署名推進委員会」が立ち上がった<sup>3)</sup>。同年には、同委員会の賛同人であり音楽ライターである磯部涼による『踊ってはいけない国、日本』（河出書房）が出版された<sup>4)</sup>。また、磯部は、2010年以降にクラブの取り締まりが強化されたことに対して、その背景に暴力事件やドラッグなどの悪いイメージとクラブが一方向的に結び付けられていると主張している<sup>5)</sup>。

だが、このようにダンスやクラブと「悪いイメージ」とが結びつけられる傾向は、他国には存在するのだろうか。Let's DANCE 署名推進委員会のホームページには以下のように述べられている<sup>6)</sup>。

クラブシーンを中心とするダンスカルチャーは、世界的にも市民権を得ており、オリンピックの開会式でもディスクジョッキー（DJ）が登場しています。……ドイツ・ベルリンのように国や市で、政策の一環としてクラブの活性化をはかり、都市の魅力や成長の一助としている都市もあります。

同委員会の署名活動などの動きを受けて、2014（平成26）年10月24日、内閣が「風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律の一部を改正する法律案」について、閣議決定を行った。結果として、風俗営業法からダンス営業規制が撤廃される運びとなったが、もし、日本にダンスやクラブと「悪いイメージ」とが結びつけられる傾向があるのだとすれば、それはなぜなのだろうか。

言うまでもなく、ダンスの中にも、行政によって保護されたり、経済的な援助を受けたりしているものもある。つまり、いわゆるハイカルチャーとしてのダンスと、クラブなどのダンスは、それらが与えるイメージだけではなく、扱われ方も異なっていると言えよう。資料を探ると、この区別は江戸時代にはすでに「舞」と「踊」の差として生じており、さらに言えば、身分制度と並行していたことがわかった。

本稿で取り上げるのは加賀藩の事例である。加賀藩の城下町であった金沢市は、1950（昭和

25) 年に市の無形文化財として能の一流派、加賀宝生を指定した。金沢能楽美術館のホームページにも「〔加賀藩が能を〕庶民にも広く奨励し……『空から謡が降ってくる』とまでいわれるように」になったとあるように、能は加賀藩そして金沢市のシンボルとされている<sup>7)</sup>。ここには「庶民にも広く奨励」とあるが、実際には士農工商すべての身分に許されていた訳ではなかった。武家の式楽（儀式に用いる舞踊および音楽）として、どの身分がどのように携わることができるか、事細かに決められていたのである。「舞」と「踊」の区別は、その過程において色濃くなっていく。

この過程を整理するために、本稿では『加賀藩史料』に着目した。加賀藩関連の資料は金沢市立図書館加越能文庫などが膨大に残されていることから<sup>8)</sup>、これらのすべてを詳細に検討することは難しい。そこで今回はその端緒として『加賀藩史料』を中心とし、加賀藩の芸能統制をめぐる全体像と（第2章）、その背景（第3章）を把握することを目指す。それに先立ち、第1章では先行研究から加賀藩および加賀藩の芸能の概要を簡単に整理する。

## 1 加賀藩の芸能

### 1-1. 加賀藩の概要

加賀藩は、藩祖である前田利家が能登（現在の石川県能登地方）を織田信長に与えられたことに始まり、後に豊臣秀吉から与えられた加賀（現在の石川県加賀地方）、越中（現在の富山県）を加えた三国から成っていた。関ヶ原の戦い後の所領は120万石に及んだが、支藩（富山藩・大聖寺藩）の分割により102万5千石となり、「加賀百万石」と呼ばれた。

加賀藩の主な産業としては、質量ともに日本一であったという煙硝や、現在も日本市場占有率9割を超えると言われる金箔、藩営から民営へと移りながら発展した九谷焼などがあげられる<sup>9)</sup>。だが、加賀藩に限らず江戸時代の経済を支えていたのは農業であり、加賀藩の農政には独自のものもある。

その一つは1604（慶長9）年に始められたと言われる、十村制度である<sup>10)</sup>。加賀藩の農政に詳しい若林喜三郎は、村をいくつか集めた組を支配する「十村」という職権およびその構造について「大藩としての加賀藩の農政機関らしい特色」と述べている<sup>11)</sup>。また、加賀藩の農政史の特色の一つにあげられるのが「改作法」である。第4代藩主綱紀の後見利常（第3代藩主）が年貢の徴収徹底を意図して1651（慶安4）年から1656（明暦2）年に実施した。改作法により徴税は強化されたが、農村内の商行為の禁止などにより、「農民は自由な金融の道を閉ざされることとなった」<sup>12)</sup>。この政策の実施の基盤となったのが十村制度であり、改作法により加賀藩の農政の礎が築かれたとされている<sup>13)</sup>。

### 1-2. 加賀藩の芸能

「はじめに」で述べたように、能は加賀藩および金沢市の象徴的な存在である。指定無形文化

財である加賀宝生の起こりは、加賀藩第4代藩主の前田綱紀に遡る。加賀藩が江戸幕府から謀反の疑いを避けるために茶や能に財力をあげたことはよく知られているが、その程度を後世から「最大級の能楽後援者」と評されているのが綱紀である<sup>14)</sup>。『金澤市史風俗編第二』には、綱紀の藩主在任中の将軍が綱吉であり、能がその外交上必要であったことが述べられている<sup>15)</sup>。また綱紀は、それまで金春流であった前田家の能を綱吉に倣い宝生流に転流している。そこで、加賀藩で独自の発展を遂げた能が加賀宝生と呼ばれることとなった。

詳しくは後に述べるが、能は將軍家との交際のためだけではなく、藩内の儀式にも用いられている。たとえば金沢城の営繕を祝して1809（文化6）年に第10代藩主治脩が催した「文化の儀式能」は、士族や僧侶あわせて2万4千人以上を招待する大規模なものであった<sup>16)</sup>。

また、卯辰山（現金沢市）で開催される観音院の神事能は、全町人が集まる「町民総出」の能であったという<sup>17)</sup>。250年以上続いたとされるこの神事能は、町奉行の支配下で開催されるという特異な形式であり、必要経費はすべて町人が負担した<sup>18)</sup>。こうした記述から、武士から町人までが能の鑑賞者であったことがわかるが<sup>19)</sup>、彼らはまた実践者でもあった。

能は、舞・謡・囃子から成り立つ。謡が独立したのは室町末期と言われるが、美川町（元加賀藩、現石川県白山市）の町史には「藩政時代の謡曲は、全国に於いても比肩すべき地のない盛況」であったと記されている<sup>20)</sup>。若林が紹介する加賀藩改作所勤務の番代手伝、梅田甚佐久の日記『梅田日記』からも下級武士が謡をたしなんでいたことがわかる<sup>21)</sup>。また、加賀藩の下級武士の文化サークルについて調査を行った松竹幸香は、金沢の旧家で調査を行うと「必ず、謡・茶の湯・生け花の本が出てくる」とし、「金沢では町人や中・下級武士にも謡、茶の湯、生け花などの芸事が普及していたことがわかる」と述べている<sup>22)</sup>。下級武士や町人は、能の鑑賞者であったと同時に、謡というかたちでは実践者でもあったと言えよう。

また、金沢市の公式ホームページで現在も続くことが確認される能以外の芸能には、「加賀万歳」「素囃子」「獅子舞」の三者がある<sup>23)</sup>。当初は越前（現福井県）の農民が金沢城で演じたものを、後に市民も学び独自の発展を遂げたものが加賀万歳であるとされている<sup>24)</sup>。また、金沢城下では「盆正月」がしばしば行われた。藩の吉事に（昇官や嗣子誕生）、城下の商工を休ませ、いわゆるお祭り騒ぎをする。そのなかで、「獅子・祇園囃・俄等の催物」が行われたという<sup>25)</sup>。「俄」には、「即興的に演じる滑稽な踊り」「俄狂言の中で踊る踊り」<sup>26)</sup>、「即興的に演じる滑稽な寸劇」などの意味があるが<sup>27)</sup>、「催物」という表現からは後者の二つのいずれかであると推測される。

他には、歌舞伎や浄瑠璃があった。『七尾市史』には、歌舞伎の巡業が七尾町人の娯楽であったことが記されているが、「年代は未詳」とあり詳しい様子はわからない<sup>28)</sup>。浄瑠璃も盛んであったようで、『美川町史』には「職人生魚業者等の勤労社会の娯楽として鑑賞を極めたものは、浄瑠璃であつた」とある<sup>29)</sup>。

また『金沢市史』によれば、農村には「虫送り太鼓や盆踊りがあ」ったとのことであり<sup>30)</sup>、『日本農業全集第五巻』に掲載されている加賀農耕風俗絵図（近世中期、著者は不明）のなかの

「村まつり」には、木に吊るされて打たれる桶太鼓を囲み、周囲で踊る人、見物している人、何かを売っている人、それを食べている人が描かれている<sup>31)</sup>。

このように捉えると大まかに言って、加賀藩の芸能は城下・城下外、武士および町人と農民に区分されるようである。金沢城に近い武士や町人が能の鑑賞者および実践者であり、農民が農業に関連する「虫送り」の遂行者であることは当然であるかも知れない。しかし、芸能は身分や地理的状况によりはっきりと線引きがされるものであろうか。そこに何らかの規律がなければ、明確な差異は生じえないのではないだろうか。第2章では『加賀藩史料』を中心に、このことについて整理する。

## 2 加賀藩の芸能統制

『加賀藩史料』は、前田家編輯部により1929～1942（昭和4～17）年にかけて出版された第1編から第15編および編外・備考1編、前田育徳会により1958（昭和33）年に出版された幕末篇の上下巻の計18巻から成る<sup>32)</sup>。前田家囑託日置謙の記した「緒言」によれば<sup>33)</sup>、1870（明治2）年に第13代藩主慶寧が邸内に家録方を設置し、領内の資料収集を命じたことが発端であった。そこで翌年から士族らが家蔵の文書典籍を提供し始めるも、1875（明治7）年に慶寧が病により死去し家録方は閉鎖される。その後、慶寧の息子利嗣（前田家第15代当主）が1884（明治16）年に新たに編輯方を設置。当時、イギリスの帝国大使館附武官であった日置が、1928（昭和3）年に編輯方から「諸氏の蒐集されたる資料を整理加除し、且つ逐次之を刊行すべきことを命じ」られたのだという。

よって『加賀藩史料』は、加賀藩士族らが保有していた『前田氏系譜』『能登古文書』『越中古文書』『加賀古文書』などの古文書の抜粋を、日置が時系列に整理し、主な出来事に書き下し分を付してまとめたものとなっている。公的な記録の類ではないため、すべての事柄が均等に網羅されているという訳ではないものの、さまざまな文書からの情報には公的な記録では持ち得ないバラエティもある。そこで本章では『加賀藩史料』を用いて、加賀藩の能に関する統制<sup>34)</sup>、加賀藩の武士・町人に対する芸能の統制、農民に対する芸能の統制の三点を整理したい。

### 2-1. 能に関する統制

『加賀藩史料』には『編外・備考』を除いた17巻のなかに、258件の能に関する文書がある（分割されて記されている場合でも、6日間にわたる儀式能など明らかに同一の行事を指しているものは1件として扱った）。そのすべてを取り上げることは難しく、また先述のように、公的な記録ではないため正確な頻度を知ることは難しい。たとえば、正月二日の恒例行事であったとされる「松囃子」の能も、記録が残る年と残っていない年がある。そこでここでは主に、どのような目的で能が行われていたのかを大まかに把握することに主眼を置く。

〔表1〕は、能に関する記録を目的別にまとめたものである。91件を占める「藩内行事」には、

表1：『加賀藩史料』にみる能の目的

目 的		記録数
藩内行事	慰能	53
	親族間	21
	本藩支藩間	9
	記念・儀式	8 計 91
祝賀	任官・成人	8
	行事終了	8
	婚姻関係	6
	病氣平癒	5
	誕生・還暦	5
	藩主帰藩	2
	その他	3 計 37
交際・外交	徳川家関連	19
	他藩招待	12
	徳川家関連（前田家演者）	2
	豊臣秀吉関連	2 計 35
藩主稽古		16
告知		8
興隆援助		7
年中行事		6
その他		58
総計		258

家臣や僧侶を観覧させる「慰能」が53件と圧倒的に多い。「前田治脩慰能を催す」など<sup>35)</sup>、「慰能」と明記されるものだけではなく、家臣に観覧させたという記録の類も含めた。ある記録には「前田齋廣能を興行し老臣等に酒肴を給ふ」とある<sup>36)</sup>。慰能は現代でいう、接待や慰安旅行に代わる場だったのだろうか。

「親族間」には、娘や妻のために能を催すなど——たとえば「前田吉徳その生母預玄院等を饗應し能を演ぜしむ」<sup>37)</sup>、親族間で行われるものを分類した。また「本藩支藩間」には、「前田齋泰、大聖寺侯前田利邇と共に能を演ずなど」など<sup>38)</sup>、大聖寺藩の藩主との共演を指す。厳密に言えば大聖寺藩は別藩ではあるが、「本藩」「支藩」の関係であるため「藩内行事」に区分した。「記念・儀式」は、ある建築物完成の記念や<sup>39)</sup>、「(金沢城)二ノ丸御殿造営竣功」による儀式能などを指す<sup>40)</sup>。

37件を占める「祝賀」は、文字通り何かを祝うための能である。たとえば、「日光廟の法會終りたるを祝し能を興行せしむ」など特別な行事が終了したことの祝賀をはじめ<sup>41)</sup>、「前田吉徳夫人痘瘡癒えたるを以て祝賀の為能を演ぜしむ」など病が癒えたことの祝賀<sup>42)</sup>、「前田齋泰能を演じ、生母栄操院の還暦を祝す」など誕生や還暦の祝賀等があげられる<sup>43)</sup>。また、「藩主帰藩」は



藩主が参勤交代から帰藩したことを祝賀するものを指す。

34 件を占めるのは「交際・外交」である。徳川家が催す能の観覧や、加賀藩以外の人々を招待して催される能を分類した。初期には豊臣秀吉との共演についての記録があるが、後に多いのは徳川家との交際であり——「前田綱紀柳營に於いて徳川綱吉の演能を観る」など<sup>44)</sup>、全 34 件中 19 件がこれに該当する。「徳川家関連（前田家演者）」は、前田家の藩主が江戸幕府で能を演じたことを意味する。また「他藩招待」は、主に参勤交代中の前田家の住居北郷邸で諸藩の士族を招待して演じられた能を指す。

「藩主稽古」には、「前田慶寧、初めて宝生友于に能を習ふ」など<sup>45)</sup>、歴代藩主の能の稽古の進捗状況に関するものも含む。他にも、「前田齋泰、慶寧に能を習ふべきことを勧む」など<sup>46)</sup>、藩主が跡継ぎに能の習得を勧めるという興味深いものもある（齋泰は第 11 代、慶寧は第 12 代藩主）。

「告知」には、儀式能を行うという予告や——「人持組以下の諸士に儀式能を観覧せしむべきことを告ぐ」<sup>47)</sup>、「人持組の士に能を催さざるべく示諭することを通牒す」などの禁令が含まれる<sup>48)</sup>。「興隆援助」は「前田綱紀、寶生九郎の勸進能を興行すべきを以て金子等を遣すべきを命ず」など<sup>49)</sup>、保護者としての援助を示唆するもの、「年中行事」は先述の正月二日恒例の「松囃子」などを含む。

以上、加賀藩の能に関する記録を整理した。能が外交だけではなく、藩内の政治、誕生や行事の際の節目、ひいては親族間のコミュニケーションにも用いられていたことがわかる。

## 2-2. 武士および町人に対する芸能統制

次に、武士および町人に対する芸能統制を取り上げる。当時の加賀藩では、先にも述べたように藩主および前田家の関係者だけではなく、家臣もある程度は能の実践者であることを許されていたようである。1806（文化 3）年の記録であるため、それ以前には許されていなかったのだとも推測されるが、第 11 代藩主齋廣が「諸士娯樂の爲自由能囃子を行ふことを許す」としている<sup>50)</sup>。

だが、能を催すということになると話は違ってくる。1808（文政 10）年に、「人持組の士に能を催さざるべく示諭することを通牒す」という記録がある<sup>51)</sup>。「人持組」は、加賀藩の家臣のなかでも最も格上の人持組頭の次に位が高い。つまり、加賀藩で能を催すことを許されていたのは藩主および前田家の関係者以外では加賀八家と呼ばれた人持組頭のみだったのである。

先に、漁業者などの娯樂として浄瑠璃が盛んであったという『美川町史』の言及を引用したが、加賀藩は商工人が浄瑠璃に携わることに寛容だったようであり、1764（明和 6）年には浄瑠璃の達者な町人を金沢城に公式に招いたという記録もある<sup>52)</sup>。

だが、浄瑠璃に比べて揺れ動いた印象のあるのが歌舞伎である。『加賀藩御定書』からは、1612（慶長 17）年に「歌舞伎者召抱停止之儀御定」が法度として下付されており、法度を犯した場合に支払うべき罰金も併せて周知されていたことがわかる<sup>53)</sup>。だが、1656（明暦 2）年には、

金沢の本願寺で歌舞伎が興行され「金澤貴賤見物」したという記録がある<sup>54)</sup>。一方で、1806（文化3）年に、町奉行が歌舞伎および狂言の興行の許可を提議したという記録があることから<sup>55)</sup>、明暦2年以降に歌舞伎の興行が禁じられていたと推測される。もっとも、その提議には家老らが反対したということであるが<sup>56)</sup>、1813（文化10）年には「（金沢城周辺で）所々に歌舞伎を興行す」とある<sup>57)</sup>。

『金沢市史』に歌舞伎について記されているので、補足したい。藩政初期は、第2代藩主利長の正室玉泉院や第3代藩主利常の正室天徳院らも歌舞伎を好んだことから、芸人達が多く城中に招かれていた<sup>58)</sup>。しかし、1631（寛永8）年4月に金沢城頽廢に及ぶ大火があり、歌舞伎などの風俗に関する規定を厳しくし、一切の興行を禁止する<sup>59)</sup>。1775（安永4）年に、金沢で行われた歌舞伎の興行は禁令以来140年ぶりであった<sup>60)</sup>。1806（文化3）年に、「町奉行は民心和楽のため歌舞伎興行を許可した」とあること<sup>61)</sup>、1831（文化10）年に、「城下の民衆の芝居興行を求める勢を抑えきれず……興行を許可するに至った」とあることは<sup>62)</sup>、『加賀藩史料』と一致する。

つまり、藩政初期には歌舞伎興行は許可されていたが間もなく禁止され、藩政期中頃には再び興行が行われる。その後間もなく禁止されたが、またすぐに解禁された。『金沢市史』には「民心和楽のため」とあるが、歌舞伎の興行はガス抜きのような役割を果たしていたのだろうか。一方、徹底して禁じられていたのが「おどり」である。

当時の「おどり」が具体的にどのようなものであったのかを正確に知ることは難しいが、『加賀藩史料』によれば、1620（元和6）年、武士は屋敷で、町人は河原で夜通しおどり、それを見物する人が数百人集まることが数日間続いたという記録がある<sup>63)</sup>。また、翌年には全国的に流行した「伊勢おどり」が金沢でも流行ったとある——「伊勢踊大に流行す。……小身の武家がたままでまじり、やがて人持かたにをどり來り、夫より御城へあがり、女中町かたのものども、をどり御意に入候よし。……町方の者ども見物仰せつけられ候」<sup>64)</sup>。

しかし、この記録以降の『加賀藩史料』の「おどり」に関する記録はすべて禁令である（〔表2〕参照。『加賀藩御定書』の「おどり」の禁令も併記）。1605（慶長10）年～1671（寛文11）年という65年あまりの禁令であるが、その後は徹底されたのだろうか。その後の『加賀藩史料』には「おどり」の記録も、禁令の記録も記されていない。

自らが「おどり」をするだけでなく、「おどり」を催してはいけないという禁令もある——1662（寛文3）年、「諸士の躍・人形遣を興行するを禁ず」<sup>65)</sup>。表現は異なるが、「人形遣」や「躍子」を自宅に宿泊させてはいけないという禁令もある——1663（寛文4）年「人形廻・躍子等を宿泊せしめ及び從來行はれざりし諸勸進を禁ず」<sup>66)</sup>。

時代によっても異なるが、加賀藩では、能、浄瑠璃、歌舞伎、おどりのそれぞれに実践者として関わって良い身分、主催者となっても良い身分が規定されていたことがわかる。これらが金沢城付近の芸能統制であるとすれば、農民らに対してはいかなる状況だったのだろうか。次節では、同じく『加賀藩史料』を中心に、農民に対する芸能統制についての記録を整理する。



表2:「おどり」に関する禁令

年	概 要	出 典
1605（慶長 10）年	風俗之儀御定 法度 一、辻をどりの事、	『加賀藩御定書復刻版前編』（p. 32）
1612（慶長 17）年	藩士の風俗に關する法を定む、…… 一、おどり並辻ずまふ、是又御停止候、自然他國よりかぶきおどりなど相越候共、一切宿借候義可為曲言事	『加賀藩史料第貳編』（p. 154）
1631（寛永 8）年	風俗之儀御定 御法度 一、町屋并下屋敷何方によらず、諸勝負・をどり・其外みだりなるあそびの事、	『加賀藩御定書復刻版前編』（pp. 55-56）
1637（寛永 14）年	士人以下の風俗に關する制限を令す。 一、面々居屋敷・下屋敷、並町屋何方にても、おどり其外人あつめ高聲猥なる遊之事、	『加賀藩史料第貳編』（p. 844）
1660（萬治 3）年	金澤町民の心得を諭す。〔古今定書〕 一、花火・流星・車火・鼠火・辻躍・辻相撲・辻立・辻歌御停止之事	『加賀藩史料第參編』（p. 889）
1660（萬治 3）年	前例の如く踊を禁止することを戒告す。 一、おどり申儀如例年御停止に候、	『加賀藩史料第參編』（pp. 894-95）
1662（寛文 2）年	前令により躍、相撲及び花火を禁止す。 一、躍	『加賀藩史料第參編』（p. 997）
1664（寛文 4）年	躍及び辻相撲を禁ず。 一、躍・辻相撲、跡々より雖為御制禁、猶以堅御停止之事、	『加賀藩史料第四編』（p. 57） 『加賀藩御定書復刻版前編』（p. 748）
1671（寛文 11）年	風俗に關する禁令を布く。 一、踊・辻相撲御停止之事、	『加賀藩史料第四編』（p. 317）

### 2-3. 農民に対する芸能統制

芸能に限らず、町人および農民の生活を取り締まる加賀藩の習わしに「二日読み」がある。江戸時代の農民が衣食住も制限されていたことはよく知られているが、加賀藩の場合、禁令を読み聞かせる習わしがあった。町人の場合は組合頭が組合の者に<sup>67)</sup>、農民の場合は村肝煎が村民に読み聞かせるのである<sup>68)</sup>。これが毎月二日に行われたことから、「二日読み」と呼ばれた。

若林によれば「二日読み」は、改作法に適応した農民を育成するためのものであったという<sup>69)</sup>。若林は1857（安政 4）年のものが最も新しいとしているが<sup>70)</sup>、農民を対象とした「二日読み」の基盤となっているのが、1679（延寶 7）年、「自今毎月一次宛百姓に法令を讀み聞かしむ」として下付された 82 カ条である<sup>71)</sup>。

そこでは、町人に対する禁令と同様に「人形廻し・をどりこ、一夜而も宿借し申間敷事」「他國之座頭・舞廻等、無故者に宿借し申間敷事」と<sup>72)</sup>、「人形廻し」「をどりこ」「座頭」「舞廻」を宿泊させることが禁じられている。また、「神事或は祭禮・年忌法事或は婚禮諸事之祝儀等に至迄、百姓不似合不可致結構事」と<sup>73)</sup>、百姓に「不似合」な冠婚葬祭の禁止も通達されている。しかし農民に対する芸能の禁令は、二日読みに示されるものだけではなかった。

表3：農民の芸能に関する禁令

年	禁止内容	概要	出典
1804（文化元）年	浄瑠璃三味線 替女 座頭	十村より百姓に衣食住の制限に關して告ぐ。 一、替女・座頭之外浄瑠璃三味線無用	『加賀藩史料第拾一編』（pp. 426-417）
1806（文政2）年	三味線	百姓の衣食住に關して告ぐ。 一、三味線・尺八・碁・象戯・茶湯杯、農業之妨に可相成儀不可致候。	『加賀藩史料第拾二編』（pp. 816-817）
1841（天保12）年	浄瑠璃 三味線 手をどり	百姓等の遊藝を習ふことを禁ず。 浄瑠璃・三味線等之遊藝を好、中には他支配より右指南之者を呼寄置、稽古等いたし候者も有……若き者共手踊りをも致興行、見物人等及群衆に候様之儀も粗相聞、……家業を忘れ、農業之手遅れも不存付族。	『加賀藩史料第拾五編』（pp. 290-91）
1667（寛文7）年	踊 辻相撲	村落に於いて踊・辻相撲を行ふことを禁ず。	『加賀藩史料第四編』（p. 177）
1806（文化3）年	踊 相撲	村々にて祭禮に際し踊・相撲等を催すを禁ず。	『加賀藩史料第拾一編』（p. 562）
1822（文政5）年	踊 物眞似	能登において祭禮に際し踊・物眞似を催す者あるを戒む。	『加賀藩史料第拾參編』（p. 212）
1668（寛文8）年	相撲見物 あやつり人形 つかひ見物	百姓の饗應・贈答・住居・衣類等に關する制限を令す。 相撲・あやつり人形つかひ、其外見物之類一圓停止之、勿論一夜に而も宿貸申間敷事。	『加賀藩史料第四編』（pp. 213-215）
1673（延寶元）年	躍子・人形遣 等の宿泊	諸郡に酒・地黄煎・干菓子を賣り、及び躍子・人形遣等を宿泊せしむるを禁ず。	『加賀藩史料第四編』（p. 367）
1758（寶歷8）年	躍子 人形遣の興行	改作方御定書 四九 躍・人形遣興行停止之儀御觸	『加賀藩御定書 下巻』（p. 793）
1804（文政元）年	芝居興行	金澤以外の地に於いて芝居等の興行を禁ずべきことを告ぐ。	『加賀藩史料第拾二編』（p. 789）
1806（文政2）年	芝居狂言觀覽	御群方の者の芝居狂言を觀覽することを禁ず。	『加賀藩史料第拾二編』（p. 791）

たとえば、町人には許されていた浄瑠璃を習うことも農民は禁じられている（〔表3〕参照）。若林が、1751（寛延4）年の「御改作御法覚書ヲ以被仰渡候御請帳」で小哥（こうた）や浄瑠璃を「声高にうたいののしる」ことが禁じられていることを指摘していたが<sup>74)</sup>、1804（文化元）年には「浄瑠璃三味線」が禁じられており、1806（文政2）年には浄瑠璃の三味線を指すかどうかは定かではないが、三味線が農業の妨げになるとして禁じられている。また、若者が興行するという「手踊り」も禁じられているが（いくつか意味があるが、興行されるものであることを考慮すると複数人で同時に踊る盆踊りの類を指すと考えられる）、「おどり」に関する禁令もたびたび発されていた。

1806（文化3）年のものには、祭礼だからといって踊り子や力士を呼ぶことはならないと但し書きがある<sup>75)</sup>。この点については、二日読みで示される祭礼の簡素化とも関連していると言え

る。1668（寛文8）年の禁令にも、「神事或は葬禮・年季之法事或は婚禮諸事之祝義等に、不似合不可致結構事」と付されており、踊り子や人形遣いが農民の冠婚葬祭には「不似合」だと断じられている。また、1804（文政元）年の禁令は金沢以外の地での芝居興行を、1806（文政2）年の禁令は芝居狂言の観覧を禁じている。町人とは異なり、農民は芝居や狂言の観覧を許されていなかったのである。

だが、禁止されるということは、行われていたということとも等しい。『日本農業全集第五巻』に掲載されている「農事遺書」は、そのことを如実に描いている。当資料は大聖寺藩の加賀江沼郡小塩辻村（現石川県加賀市小塩辻町）の十村を1691（元禄4）年から務めた鹿野小四朗が<sup>76)</sup>、農業に関する実験などの成果を子孫に残すために書きとめたものである<sup>77)</sup>。田の耕起の時期、農具について、稲のかり方について……と農業に関する事柄が続くが、ここで着目するのは最後にしたためられている「人生訓一身持ちについて」である<sup>78)</sup>。

春秋二回の祭りには近在村々の祭りにまで出かけていって、頼まれもしないのに踊りの音頭をとって夜の明けるまで踊りくるい……しぶしぶ野良に出かけるけれども、生あくびばかり出て仕事にならず……歌舞伎や操り人形など、とにかくにぎやかなことがあると、人よりも先に情報を仕入れ……家業は不得手で上手なものは小唄や浄瑠璃と粋がってみたところで、ついには親を破産させ、自らもまた村にはいられなくなって流れ者に身を落としてしまう。決して見習ってはならない。

当資料は元禄年間（1688～1704）のものであるため、さまざまな事柄が禁止される以前であったとも考えられる。だが、少なくともすでに禁止されているはずの「踊」が夜通し行われている。こうした実情があったからこそその禁令であったと推測されるが、では農民に公式に許されていた芸能は存在したのだろうか。

農民に許された芸能の一つに農業関連の催事があった。『加賀藩史料』に、「虫送り」についての記述がある。1793（寛政5）年、第9代藩主前田重教の息子齋敬が死去した際、忌中による鳴物遠慮が言い渡されたにも関わらず、加賀三郡の群奉行らが稲虫駆除のために太鼓を打ち鳴らす虫送りの実施を請願したというものである<sup>79)</sup>。現在でも「虫送り太鼓」は芸能化しているが、1801（享和元）年に「虫送り祭」と表記されている記録があり<sup>80)</sup>、当時すでに稲作に欠かせない行事であることに加え何らかの非日常を楽しむ催しとなっていたことが推測される。

また、同様に太鼓を打ち鳴らす行事として認められていたのは「雨乞い」である。いつから太鼓が用いられているのかはわからないが、古来より太鼓がつきものであったようである。七尾市（江戸時代は加賀藩）の指定無形文化財である「七尾豊年太鼓」の結成50周年記念誌『天鼓雷鳴』に掲載されている七尾市八幡町八幡神社や小島町妙国寺の扁額の写真には雨乞いで太鼓を打つ人が描かれており（時代は不明）<sup>81)</sup>、その起こりは約700年前であるとも言われている。『加賀藩史料』にも、1843（天保14）年と1853（嘉永6）年に雨乞いが行われたことを示す記録が残っ

ている<sup>82)</sup>。

また、ある資料によれば農民の休日として公式に認められていたものに「氏神祭」がある<sup>83)</sup>。鈴木敏夫は、藩政期の農民が「月平均にして二回は宗教行事とかかわりを持つこと」を明らかにし<sup>84)</sup>、「宗教的権威を借りて……余暇時間を創り出したと見てさしつかえない」と述べている<sup>85)</sup>。報恩講など宗教上の目的による集まりには、表向きには許されていないものの娯楽や芸能が伴っていたのである——「参詣人が集まると踊りが始まり……本堂においては浪花節や万歳が、境内では相撲などが催された」<sup>86)</sup>。以上のように、農業に関わる行事（虫送りおよび雨乞い）および宗教的な催事が、農民に許されていた芸能であったと言える。

以上のような身分ごとの芸能の是非が定められていたことの背景については、想像が容易であるものもある。たとえば、能の主催が人持組以下には許されていないのは、経済的な理由に加え、「式楽」としての非日常性を保つためでもあったのだろう。また、商工人は歌舞伎や芝居の見物、浄瑠璃をたしなむことが許される一方、農民には禁じているということも農業に専念すべきであるという説明が可能である。しかし、禁令の背景には別の側面もあったと考えられる。

### 3 加賀藩の芸能統制の背景

#### 3-1. 一揆への対策

加賀藩における一揆と言えばまず思い浮かぶのが加賀の一向一揆である。1488（長享2）年頃から1580（天正8）年にかけて、約90年間、本願寺の僧侶や門徒の農民が加賀一帯を支配した。第1代藩主利家は、身内を宗派の信者とする保護・懐柔政策をとったというが<sup>87)</sup>、歴代の藩主が一向一揆に限らず、一揆に敏感であったことは容易に想像できる。

1676（延寶4）年には、「法義を勧むる為に衆人を會合するを禁ず」というお触れがある<sup>88)</sup>。法義のためであっても人を集めてはいけないというのである。また同年に、「火災及び祭禮を見る為群集するを禁ず……見物人一人も出申間敷候」という触書もある<sup>89)</sup>。1806（文化3）年「百姓風俗之儀改作奉行より觸」には、寺や道場だけではなく民家であっても人を集めて「農業に障を致す」者は吟味するという内容がある<sup>90)</sup>。複数が集まることで、一揆へとつながることを危惧していたのだろうが、たとえば1768（明和5）年の次のような事例が『加賀藩史料』には残っている<sup>91)</sup>。

能美郡小松（現石川県小松市）の農民らが諸事情で行われなかった農地の見分を願う旨を大声で叫んでいたところ、「毎日一人づゝたゝきて再三の吟味」が行われ、入牢を命じられた。約一年間の入牢を経て解放されたものの、牢死した者もあったという。藩が群衆を禁じた理由の一つには、こうした行為を事前に防ぐということもあったのだろう。その契機となり得る、おどりと浄瑠璃にもそうした側面は当然あったと考えられる。

また藩は、十村などの豪農の存在はあったものの、農民が経済力を持つことを警戒していたようである。第1章でも述べたように、当時は農村内の商行為が禁止されていた。このこととも無

関係ではないだろうが、1667（寛文7）年、「踊・辻相撲」を禁じる触書に付された文書には、「おどり候もの有之由に候其所に、瓜・餅其外何によらず賣物持参、百姓商賣不仕候様急度御申付可有候」とある<sup>92)</sup>。農民の経済力が一揆の原動力となることを危惧したのではないだろうか。

### 3-2. 風紀の是正

また、「踊」の禁止には別の側面もあったようである。具体的にどのような状態を指してそのような形容がなされるのかはわからないのだが、[表2]の1631（寛永8）年の禁令では「をどり」は「みだりなるあそび」の一種とされている。先にも引用した、宿泊させてはいけないという「躍子」の場合、当時の躍子は私娼であったとされていることから、それが「みだりなる」と形容されることの想像はつく。だが、必ずしもそれを生業とする者の「おどり」だけがそうであると考えられていた訳ではないようである。

1660（萬治3）年の禁令には、「在々男女相まじはりおどり申旨……御寄合所よりおどり不申様に可申付旨被仰渡候條」という付記がある<sup>93)</sup>。男女が一緒になって踊っているようであるが、寄合所から踊りが禁止である旨を申付けると言う。1664（寛文4）年の禁令の中にも「をどり場に女も罷出候由に候間、とらへ被逐吟味御穿鑿」と<sup>94)</sup>、「をどり場」に女がいた場合は捕えて厳しく取り調べを行うというものがある。これらが、おどりを生業とする女を指しているかそうではないかは定かではないが、次の禁令は一般の人々を指している。

踊りではなく越前万歳に関するものであるが、1823（文政6）年に「前田齋廣、越前萬歳を夜に入りて演ぜしむることを禁ず。……右は見物事之儀に候へば、輕き男女入込候儀甚猥り成事に候」という禁令がある<sup>95)</sup>。夜に見物の男女が入り混じることが「はなはだみだり」だというのである。このように考えると、おどりの禁令は男女の接近を防ぐためであったと言えるのだろうか。

### 3-3. 舞と踊

このように整理すると、「おどり」は宗教的にも、風紀的にも（為政者側にとっての）悪影響を及ぼすものと捉えられていたことがわかる。つまり加賀藩では、能（＝舞）が推奨される反面、「踊」は全面的に抑圧されていた。ここで、「舞」と「踊」について整理しておきたい。

民族舞踊学を専門とする板谷徹が、「舞」と「踊」の区分について、江戸時代の国学者本居内遠をはじめ、折口信夫、柳田国男のそれぞれの定義を整理している。板谷は、19世紀半ばには、能などの舞を貴族的なもの、歌舞伎の流れを汲む踊を庶民的なものとする見方が一般的であったが、そうした区分が通用しにくくなったこと、本居内遠が著書『賤者考』（1847（弘化4）年）で、舞は意志にもとづくもの、踊は我を忘れ即興的な要素もあるものとしていることを述べている<sup>96)</sup>。

さらに、舞を旋回運動、踊を跳躍運動とする折口（『古代研究』）、舞を行動の副産物とした歌またはかたりごと、踊を行動とする柳田（『日本の祭』）を引用し、「舞」の本質は旋回を基本と

し何かを「舞う」こと、「踊」の本質は跳躍する行動そのものと捉える<sup>97)</sup>。また板谷は、「踊」の場が不特定であるのに対し、「舞」は特定の舞台を設けること、そのことが「舞」を行動性から脱却させ舞台芸に昇華させたことを指摘する<sup>98)</sup>。このことは「踊」が舞台芸にはなり得ないということでもあり、その場所や集う人々が流動的であるからこそエネルギーが生じる可能性があるとも言える。

音楽学者の小島美子は、たとえば歌舞伎踊などの「跳躍的なリズム」であった踊りが、舞台芸能化される過程で「跳躍性を失っていった」こと、一方で踊り念仏は「民衆の中にあった跳躍的なリズム感をひじょうに強調する形で使うことによって、人々をエクスタシーに誘い込んだ」ことを指摘している<sup>99)</sup>。

また、民俗学者である山路興造も、一遍の踊念仏を指し「(臨時舞台で)自らが踏み鳴らす板の響きが、鉦の音と相乗していっそう宗教的エクスタシーを高める効果を発揮したに違いない」と述べる<sup>100)</sup>。宗教に限らず世界の多くの事例で音楽やダンスを用いてトランスに陥る事例が紹介されているが<sup>101)</sup>、「舞」ではなく「踊」で誘発されるエクスタシーが、一揆や反乱を刺激したり、風俗の乱れを誘発したりするとして危惧されていたことは現代に生きる我々も感覚的に頷くことができる。町人が、「踊」(歌舞伎)を見ることは許されながら、「踊」という行為は許されなかったことは象徴的である。また「踊」の持つ場の流動性が人々を巻き込み、集団が生まれるということも危険視される要因だと言えよう。さいごに、このことも併せて考察を述べたい。

## おわりに

加賀藩は藩主や武士および町人に、加賀宝生という「舞」を推奨してきたが、その携わり方(主催、演技手、囃子)を細かく規定し、農民がそこに立ち入ることを許さなかった。一方、「踊」は禁止される程に行われており、農村では「踊りくるう」者もあった。だが加賀藩は、一揆の誘発や風紀の乱れを恐れ、少なくとも政治の上では身分に並行する芸能の線引きを行おうとした。

「舞」はハイカルチャーとして保護し、「踊」を危険視し禁じるという傾向からは、現代の状況を思い浮かべずにはいられない。先にも述べたように、結果としては、風俗営業法からダンス営業規制が撤廃された。だが、撤廃までの過程において、人々が「ダンス」をどう考えるかが立ち現れることとなったことは興味深い。

警察庁は、風俗営業法の一部法令改正に先立ちパブリックコメントを募集した。その結果と解釈が2012(平成24)年11月に発表されたが<sup>102)</sup>、そこでは営業の規制の理由が「行われ方によっては、男女間の享樂的雰囲気が過度にわたり、善良の風俗と清浄な風俗環境を害し、又は少年の健全な育成に障害を及ぼすおそれがあるから」と説明されている。また、「男女がペアとなって踊ることが通常の形態とされているダンスを客にさせる営業は、その性質上、男女間の享樂的雰囲気が過度にわたる可能性がある」が、「ヒップホップダンスや盆踊りなど、男女がペアとなって踊ることが通常の形態とされていないダンスを客にさせる営業」はそのような可能性が



あるとは言い難いため、原則として規制対象としないとされた。

懸念されていたのは「男女間の享樂的雰囲気」であったようだが、先に、男女が入り混じって「はなはだみだり」であるため越前万歳を夜に演じてはいけない、という禁令を引用した。この禁令は1823（文政6）年に付されたものであったが、約200年後の現代も、同様の捉え方が続いていることに驚かされる。

Let's DANCE 署名推進委員会は、ダンス営業規制の撤廃後も警鐘を鳴らしている<sup>103)</sup>。

〔改正前までは〕「3号営業」とされていたクラブなどは、新設される「特定遊興飲食店営業」という枠組みに対応することになります。しかし、これには重大な問題があります。まず「遊興」の定義が不明確です。現行法の解釈によると、「客に歌、ダンス、ショー、演芸、映画その他の興行等」「生バンドの演奏等」を見せたり、させる行為などとされており、この解釈通りになれば、ダンスが規制対象として残るだけでなく、生バンド演奏などを行うライブハウスまで規制の対象とされかねません。風営法から「ダンス」が削除されても、「遊興」という形でさらに規制対象が拡大されることが予想されます。

「踊」の持つ潜在性（身体性の喚起やエクスタシー）は、江戸時代から現在まで、何かしらの危機（たとえば「男女間の享樂的雰囲気」）を駆り立てる存在のようである。こうした捉え方が変わらない限り、法律が改正されたとしても、繰り返し「表現の自由」をはじめとする権利との齟齬が生じるのではないだろうか。

本稿では、『加賀藩史料』の禁令からみた「舞」と「踊」に対する意図的な区別と序列化を整理した。しかし、禁令に対する町人や農民の反応、禁令が犯された場合の取締りなどについては明らかにすることができなかった。今後はこれらも視野に入れ、現代につながる課題として取り組みたい。

#### 註

- 1) 『ビートたけしのTVタックル』。テレビ朝日系、2014（平成26）年4月21日（月）放送。テレビ朝日映像株式会社ホームページ <http://www.tv-asahipro.co.jp/about/company/>（2015年5月22日アクセス）。
- 2) 条文「集会、結社及び言論、出版その他一切の表現の自由は、これを保障する」。
- 3) ホームページ <http://www.letsdance.jp/>（2015年5月22日アクセス）。
- 4) 翌年に続編『踊ってはいけない国で踊り続けるために』（河出書房）と題した著書を出版。
- 5) 「深夜のダンス禁じるのはヘンでしょ」（2012年10月11日、『朝日新聞』13版）。
- 6) ホームページ <http://www.letsdance.jp/>（2015年5月22日アクセス）。
- 7) <http://www.kanazawa-noh-museum.gr.jp/>（2014年10月10日アクセス）。
- 8) 1948（昭和23）年に加賀藩第5代藩主前田綱紀が収集した典籍・書跡類を中心とする前田育徳会尊経閣文庫が、加賀藩行政資料を中心とする資料を金沢市へ寄贈したもの。
- 9) 中西孝・日吉芳郎・本浄高治、1991年、「加賀藩の産業・工芸の史跡と遺品—化学風土記：わが街の化学史跡」『化学と教育』39（4）、日本化学会、pp. 420-424

- 10) 若林喜三郎, 1970 年, 『加賀藩農政史の研究上巻』吉川弘文館, p. 111
- 11) 注 10 に同じ.
- 12) 米原寛, 1978 年, 「農隙所作村々寄帳・解題」『日本農業全集第五巻 農事遺書(加賀) 鹿野小四朗・耕作早指南種稽歌(若狭) 伊藤正作・農業蒙訓(若狭) 伊藤正作・農隙所作村々寄帳(加賀・越中・能登) 加賀藩改作御役所』山田龍雄ほか編, 社団法人農山漁村文化協会, pp. 358-375
- 13) 注 12 に同じ.
- 14) 棚町知彌・江口文恵・入口敦志・佐藤和道・竹本幹夫・青柳有利子, 2007 年, 「前田綱紀時代の加賀藩資料に見える能楽」『演劇研究センター紀要 IX 早稲田大学 21 世紀 COE プログラム〈演劇の総合的研究と演劇学の確立〉』9, pp. 105-128
- 15) 中村安孝, 1973 年, 『金澤市史風俗編第二』名著出版, p. 389
- 16) 注 15 掲載書, pp. 390-391.
- 17) 田中善男, 1988 年, 『金沢町人の世界』国書刊行会, p. 119
- 18) 注 17 掲載書, p. 120.
- 19) 加賀藩の支藩である大聖寺藩でも「金沢藩と同様に士民に愛好され」という(加賀市史編纂委員会, 1978 年, 『加賀市史通史上巻』加賀市役所, p. 155).
- 20) 田中鐵太郎, 1979 年, 『美川町史下巻』文献出版, p. 526
- 21) 若林喜三郎, 1988 年, 『加賀藩史話』能登印刷株式会社, p. 115
- 22) 江森一郎・竹松幸香, 1997 年, 「加賀藩与力, 中村豫卿の学習・教育環境と文化サークル—幕末の天保, 嘉永年間を中心に」『金沢大学教育学部紀要人文・社会科学編』46, pp. 1-18
- 23) <http://www4.city.kanazawa.lg.jp/17003/dentou/> (2015 年 5 月 22 日アクセス).
- 24) 田中鐵太郎, 1979 年, 『美川町史上巻』文献出版, p. 316
- 25) 注 24 掲載書, p. 316.
- 26) 『大辞泉』(2012 年, 第二版下巻, 小学館, p. 2770) より.
- 27) 『大辞林』(2006 年, 第三版, 三省堂, p. 1941) より.
- 28) 七尾市史編纂専門委員会, 1974 年, 『七尾市史』石川県七尾市役所, p. 556
- 29) 注 20 掲載書, p. 527.
- 30) 金沢市史編さん委員会, 2001 年, 『金沢市史 資料編 14 民俗』金沢市, p. 456. 「虫送り」は害虫駆除のため松明をたいたり, 太鼓を打ち鳴らしたりする行事.
- 31) 山田龍雄・飯沼二郎・岡光夫・守田志郎編, 1978 年, 『日本農業全集第五巻 農事遺書(加賀) 鹿野小四朗・耕作早指南種稽歌(若狭) 伊藤正作・農業蒙訓(若狭) 伊藤正作・農隙所作村々寄帳(加賀・越中・能登) 加賀藩改作御役所』社団法人農山漁村文化協会, p. 14
- 32) 『第壹編』から『第拾五編』は前田家編輯部編(1929-1942 年, 石黒文吉), 『幕末篇上巻』および『幕末篇下巻』は前田育徳会編(1958 年, 広瀬豊作).
- 33) 前田家編輯部編, 1929-1942 年, 『加賀藩史料第壹編—自天文 7 年至慶長 10 年』石黒文吉, pp. 6-11
- 34) これまでも加賀宝生についての研究がなかった訳ではないが, 多くはある特定の時期やある特定の藩主, ある特定の資料を根拠にするものとなっているため, ここでは全体像の把握を目的とする.
- 35) 前田家編輯部編, 1929-1942 年, 『加賀藩史料第八編—自宝暦 8 年至安永 3 年』石黒文吉, p. 953
- 36) 前田家編輯部編, 1929-1942 年, 『加賀藩史料第拾三編—自文政 4 年至文政 12 年』石黒文吉, p. 742
- 37) 前田家編輯部編, 1929-1942 年, 『加賀藩史料第六編—自正徳 4 年至元文 2 年』石黒文吉, p. 638
- 38) 注 33 掲載書, p. 1031.
- 39) 注 34 掲載書, p. 899.
- 40) 前田家編輯部編, 1929-1942 年, 『加賀藩史料第拾二編—自文化 8 年至文政 3 年』石黒文吉, p. 2
- 41) 前田家編輯部編, 1929-1942 年, 『加賀藩史料第五編—自元禄 4 年至正徳 3 年』石黒文吉, p. 422
- 42) 注 41 掲載書, p. 937.
- 43) 注 33 掲載書, p. 97.

- 44) 前田家編集部編, 1929-1942 年, 『加賀藩史料第四編—自寛文 3 年至元禄元年』石黒文吉, p. 887
- 45) 前田育徳会, 1958 年, 『加賀藩史料幕末篇上巻』広瀬豊作, p. 191
- 46) 注 45 掲載書, p. 137.
- 47) 注 40 掲載書, p. 2.
- 48) 注 36 掲載書, p. 774.
- 49) 注 44 掲載書, p. 895.
- 50) 前田家編集部編, 1929-1942 年, 『加賀藩史料第拾一編—自享和 1 年至文化 7 年』石黒文吉, p. 564
- 51) 注 36 掲載書, p. 774.
- 52) 注 35 掲載書, p. 571.
- 53) 加賀藩編, 1981 (1936) 年, 『加賀藩御定書復刻版前編』金沢文化協会, p. 49.
- 54) 前田家編集部編, 1929-1942 年, 『加賀藩史料第参編—自寛永 18 年至寛文 2 年』石黒文吉, p. 470
- 55) 注 40 掲載書, p. 589.
- 56) 注 40 掲載書, p. 589.
- 57) 注 40 掲載書, p. 294.
- 58) 注 30 掲載書, p. 314.
- 59) 注 58 に同じ.
- 60) 注 58 掲載書, p. 315.
- 61) 注 60 に同じ.
- 62) 注 60 に同じ.
- 63) 前田家編集部編, 1929-1942 年, 『加賀藩史料第貳編—自慶長 11 年至寛永 17 年』石黒文吉, pp. 466-67
- 64) 注 63 掲載書, pp. 475-76.
- 65) 注 44 掲載書, p. 36.
- 66) 注 44 掲載書, p. 62.
- 67) 注 15 掲載書, p. 88.
- 68) 注 10 掲載書, p. 630.
- 69) 注 68 に同じ.
- 70) 注 68 に同じ.
- 71) 注 44 掲載書, p. 578.
- 72) 注 44 掲載書, p. 580.
- 73) 注 44 掲載書, p. 584.
- 74) 若林喜三郎, 1972 年, 『加賀藩農政史の研究下巻』吉川弘文館, pp. 478-488
- 75) 注 50 掲載書, pp. 562-563.
- 76) 清水隆久, 1978 年, 「農事遺書(加賀) 鹿野小四朗: 翻刻・現代語訳・解題(1)」『日本農業全集第五巻 農事遺書(加賀) 鹿野小四朗・耕作早指南種稽歌(若狭) 伊藤正作・農業蒙訓(若狭) 伊藤正作・農隙所作村々寄帳(加賀・越中・能登) 加賀藩改作御役所』山田龍雄ほか編, 社団法人農山漁村文化協会, pp. 3-185
- 77) 注 76 に同じ.
- 78) 注 76 に同じ.
- 79) 前田家編集部編, 1929-1942 年, 『加賀藩史料第拾編—自寛政 1 年至寛政 12 年』石黒文吉, p. 433・p. 628
- 80) 注 74 掲載書, pp. 499-500.
- 81) 七尾豊年太鼓保存会, 2002 年, 『天鼓雷鳴』七尾豊年太鼓保存会, p. 21
- 82) 前田家編集部編, 1929-1942 年, 『加賀藩史料第拾五編—自天保 10 年至弘化 4 年』石黒文吉, p. 509; 注 41 掲載書, p. 513.

- 83) 注 74 掲載書, pp. 499-500.
- 84) 鈴木敏夫, 1972 年, 「江戸後期における農民の余暇と遊戯」『体育學研究』第 16 巻第 4 号, 日本体育学会, pp. 183-188.
- 85) 注 84 に同じ.
- 86) 西山郷史, 1991 年, 「節談説教の風土」『体系日本歴史と芸能第五巻踊る人々—民衆宗教の展開』網野善彦ほか編, 平凡社, pp. 28-61.
- 87) 注 86 掲載書, p. 35.
- 88) 注 44 掲載書, p. 499.
- 89) 注 44 掲載書, p. 494.
- 90) 注 50 掲載書, p. 498.
- 91) 注 35 掲載書, p. 548.
- 92) 注 44 掲載書, p. 177.
- 93) 注 54 掲載書, p. 895.
- 94) 加賀藩編, 1981 (1936) 年, 『加賀藩御定書復刻版後編』金沢文化協会, p. 748
- 95) 注 36 掲載書, p. 271.
- 96) 板谷徹, 1990 年, 「〈舞う〉こと, その世界」『体系日本歴史と芸能第壹巻 立ち現れる神—古代の祭りと芸能』網野善彦ほか編, 平凡社, pp. 146-170
- 97) 注 96 に同じ.
- 98) 板谷徹, 1991 年, 「〈踊る〉こと, その世界」『体系日本歴史と芸能第九巻豪奢と流行—風流と盆踊り』網野善彦ほか編, 平凡社, pp. 82-107
- 99) 小島美子, 1984 年, 「音楽からみた日本のシャマニズム」『日本のシャマニズムとその周辺—日本文化の原像を求めて』加藤九祚編, 日本放送出版協会, pp. 287-335.
- 100) 山路興造, 1991 年, 「映像解説」『体系日本歴史と芸能第五巻踊る人々—民衆宗教の展開』網野善彦ほか編, 平凡社, pp. 157-208
- 101) たとえば M. エリアーデは「歌や踊りはエクスタシーに入るためにいちばん頻繁に用いられる方法である」と述べ, さまざまな事例を紹介している (M・エリアーデ, 1885 年, 『シャーマニズム』堀一郎訳, 冬樹社, p. 307).
- 102) 電子政府の総合窓口「e-Gov」ホームページ <http://www.e-gov.go.jp/> (2015 年 5 月 22 日アクセス).
- 103) ホームページ <http://www.letsdance.jp/> (2015 年 5 月 22 日アクセス).

## 追 記

一部, 現代においては適切ではない表現があるが, 資料の歴史的な背景を考慮し原典の表記のまま引用した.